

関西大学大学院

東アジア
文化研究科



東アジアの「知」を開拓する 国際的研究者及び 高度専門職業人を養成

沿革

関西大学は、アジア文化研究の領域で多数の優れた研究者を擁し、国際的な教育・研究活動を展開してきました。その実績が認められ、2007年度から開始された文部科学省「グローバルCOEプログラム」において、本学が申請した「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成一周縁アプローチによる新たな東アジア文化像の創出―」が人文科学分野で採択されました。これを受けて、2008年4月に文学研究科を改組し、文化交渉学専攻・東アジア文化交渉学専修を設置しました。

この専攻が2010年度に完成年次を迎えることを踏まえ、2011年度よりこの専攻を文学研究科から独立させ、新たに東アジア文化研究科・文化交渉学専攻を開設しました。これによって、本学の特色ある東アジア文化の教育研究を一層発展させるとともに、「グローバルCOEプログラム」で培われた世界的教育研究ハブとしての充実をはかります。

「グローバルCOEプログラム」は最上位となるS評価を受け、これにより本研究科は2012・13年度、文部科学省「卓越した大学院拠点形成支援補助金」の対象になるという栄誉を得ています。

アドミッション・ポリシー

東アジア文化研究の理論及び応用を教授・研究し、東アジア文化研究を領域とする人文科学分野の研究者、高度専門職業人の養成を目的とします。

本学の教育理念である「学の実化」のもと、真理の追究をおこない学術の創造を進めるとともに、広く社会・文化の進展に寄与する人材の育成をはかるものです。

授業においては、東アジアにおける文化交渉の多彩な姿を人文学諸領域から分析する専門教育をおこない、豊かな学識の修得、複眼的・総合的な視点の導入・把握、それらにもとづく新しい研究領域の開拓をめざします。

入学試験では、東アジア文化に関する専門的知識を有するとともに、外国語能力にすぐれた国内外の人材を求めています。幅広い知的好奇心をもち、研究活動にとりくむ意志を有する人を歓迎します。

特色

東アジア文化研究科の教育研究の柱となる文化交渉学とは、東アジアという一定のまとまりの中での文化生成、伝播、接触、変容に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとする学問です。

21世紀に入って、東アジア諸国は相互依存の度合いを一層強めつつあります。それにもかかわらず、諸国間で感情的摩擦が表面化するの、他国文化に対するスタンスの未成熟があると考えられます。これを解決するには、自他の文化を優劣や強弱の尺度から評価するのではなく、一国文化をグローバルな視点から把握する視座と手法の確立が求められます。東アジア文化研究科は、一国文化主義的発想を脱却し、東アジア文化を絶えざる他者との交渉の連鎖によって形成された複合体としてとらえる文化交渉学の視点に立ち、東アジアにおける文化交渉の諸相を人文学諸分野から動的・複合的に分析することで、東アジアの文化研究を大きく転換するとともに、それを共有する国際的人材を育成することをめざします。

東アジア文化研究科での学び

文化交渉学

本研究科の教育研究の柱となる「文化交渉学」とは、国家や民族という分析単位を超えて、東アジアという一定のまとまりを持つ文化複合体を措定し、その内部での文化生成、伝播、接触、変容に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとする学問領域です。そこでは、従来の人文学の学問分野ごとの研究枠組の越境と、ナショナルな研究枠組の越境の、二つの越境が求められます。すなわち、言語、思想、民族、宗教、文学、歴史など学問分野ごとの知見を個別叙述的に蓄積するのではなく、東アジアを舞台とする文化交渉の全体像を把握する方法を身につけ、各国ごとに個別に行われる文化研究の国境を越えて東アジア全体を多様な文化接触の連鎖として認識する視座を養うことを目的としています。

このような、新時代に対応し、国際的な競争力に耐えうる専攻とし、上記で述べた人材を養成するため、新しい教育体制とカリキュラムを採用しています。

集団指導体制

研究指導教員1名に加え、それとは専門領域を異にする副指導教員（前期課程は1名以上、後期課程は2名以上）による集団指導体制をとります。通常の研究指導は指導教員による演習を通じて行われますが、副指導教員も適宜参加して他領域からのアドバイスを加えます。また研究計画の進展をチェックして、教員—学生間および教員相互での情報の共有化に努め、研究領域別の枠組を越えた視野の養成をはかります。

国際的競争力に対応した授業

国際化時代に対応できるように、学生には学術的発信のための外国語運用能力の習得を求めます。本研究科の学生は、それぞれの研究課題に応じて必要なアジア言語を母国語以外に身につけます。さらに、複数の東アジア文化を検討する国際会議への参加を念頭において、英語運用能力の向上も重視し、それを実現できる外国語カリキュラム構成とします。

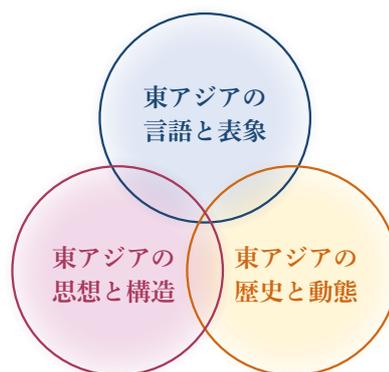
履修指導の方法

本研究科では、すべての授業科目が春学期・秋学期の2学期制となっており、原則として年度始めに履修登録をします。入学時に、前期課程学生は2年分、後期課程学生は3年分の計画書を提出します。あわせて、毎年の年度始めには詳細な研究プランを作成します。これは学習研究をスムーズに進めていくためのもので、これに基づき、個別に履修指導を行い、本専攻の趣旨と特色を踏まえた研究設計ができるようにバックアップします。

コアとなる研究領域と複合的科目の有機的連動

本研究科では、東アジア文化を研究するための基本的視角として、「東アジアの言語と表象」、「東アジアの思想と構造」、「東アジアの歴史と動態」の3つの研究領域を設定しています。本研究科の学生は、これら3領域のいずれかに自らの研究の基盤となる研究課題を設定し、そこから分野・地域の越境による展開を試みることになります。

そのため、科目編成は個々の領域の特性に重点を置いた内容と、他領域との複合を意識する内容との有機的連動をはかることになります。たとえば、「東アジアの言語と表象」の領域に関わる研究を志す院生の場合は、同領域の演習科目において研究指導を受け、講義科目において研究方法や研究資料についての専門性を高めるとともに、「東アジアの思想と構造」あるいは「東アジアの歴史と動態」に関わる講義科目を複数履修して、他領域の方法や資料に関わる深い知見を修得するようにします。他の2領域の研究を志す場合についても同様です。



修了要件

博士課程前期課程では、必修科目（演習）から8単位、領域選択科目 A 群から2単位、領域選択科目 B 群2単位を含む32単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査及び試験に合格することとします。

博士課程後期課程では、指導教員の担当する必修科目（演習）12単位を含めて16単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することとします。

DDプログラム—2つの学位の取得が可能

本研究科は文学研究科、外国語教育学研究科と共に、と韓国・嶺南大学校大学院東アジア文化学科との間で、デュアル・ディグリー・プログラム（DDプログラム）を実施しています。これは、本研究科の博士課程前期課程の学生が、2学期（1年間）嶺南大学校に留学し、所定の要件を満たすことによって、関西大学から修士（文化交渉学）、嶺南大学校から東アジア学修士の学位をそれぞれ授与される制度です。DDプログラムに参加する本研究科の学生は2年コースから3年コースへの変更も可能で、年間30万円の奨学金も支給されます。

カリキュラム

博士課程前期課程

■必須科目

- 文化交渉学（東アジアの言語と表象）
- 文化交渉学（東アジアの思想と構造）
- 文化交渉学（東アジアの歴史と動態）

■領域選択科目

- A群
- 東アジア文化資料研究（言語と表象）A・B
 - 東アジア文化資料研究（思想と構造）A・B
 - 東アジア文化資料研究（歴史と動態）A・B
- B群
- 文化交渉学領域研究（東アジアの言語と表象）A・B
 - 文化交渉学領域研究（東アジアの思想と構造）A・B
 - 文化交渉学領域研究（東アジアの歴史と動態）A・B

■共通科目

- A群
- 文化交渉学概論 A・B
 - 文化交渉学資料調査論
 - 文化交渉学特殊研究 A・B
- B群
- アカデミック外国語（各語種）(1) A・B
 - アカデミック外国語（各語種）(2) A・B

修士学位取得までのステップ

1. 修士論文構想発表会

2. 修士論文計画書提出

3. 論文提出

4. 最終試験(口頭試問)

5. 合格

6. 学位授与

	前期課程1年次	前期課程2年次	
必修科目	●文化交渉学演習(1)A・B	●文化交渉学演習(2)A・B	修士論文
領域選択	●東アジア文化資料研究A・B ●文化交渉学領域研究A・B	●東アジア文化資料研究(他領域) ●文化交渉学領域研究(他領域)	
共通科目	●文化交渉学概論A・B ●文化交渉学特殊研究A・B	●文化交渉学資料調査論 ●アカデミック外国語A・B	
	●共通講義科目(前期課程・後期課程)		

論文構想発表会

論文構想発表会は、修士論文または博士論文の内容を口頭で発表する場であり、本研究科の教員と学生が一堂に会します。ふだんのゼミとは異なり、指導教員や副指導教員以外の教員や、異なる研究領域の学生から質問やアドバイスを受けることができます。

学位取得者数2011年9月期～2016年9月期

- 博士（文化交渉学）
課程博士39人、論文博士17人
- 修士（文化交渉学）89人

学位論文〔博士（文化交渉学）〕から誕生した著書

李曉辰著

『京城帝国大学の韓国儒教研究——「近代知」の形成と展開』

(勉誠出版、2016年)

岑玲著

『清代中国漂着琉球民間船の研究』(榕樹書林、2015年)

高橋沙希著

『青木繁 世紀末美術との邂逅』(求龍堂、2015年)

海曉芳著

『文法草創期中国人的漢語研究』(商務印書館、2014年)*

鄒双双著

『「文化漢奸」と呼ばれた男 万葉集を訳した錢稻孫の生涯』

(東方書店、2014年)*

*は、東アジア文化研究科の前身である関西大学大学院文学研究科文化交渉学専攻修士の学位論文に基づく著書。

博士課程後期課程

■必須科目

- 文化交渉学研究（東アジアの言語と表象）
- 文化交渉学研究（東アジアの思想と構造）
- 文化交渉学研究（東アジアの歴史と動態）

■領域選択科目

- A群
- 東アジア文化資料研究（言語と表象）A・B
 - 東アジア文化資料研究（思想と構造）A・B
 - 東アジア文化資料研究（歴史と動態）A・B
- B群
- 文化交渉学領域研究（東アジアの言語と表象）A・B
 - 文化交渉学領域研究（東アジアの思想と構造）A・B
 - 文化交渉学領域研究（東アジアの歴史と動態）A・B

■共通科目

- A群
- 文化交渉学概論 A・B
 - 文化交渉学資料調査論
 - 文化交渉学特殊研究 A・B
- B群
- アカデミック外国語（各語種）(1) A・B
 - アカデミック外国語（各語種）(2) A・B

博士学位取得までのステップ



	後期課程1年次	後期課程2年次	後期課程3年次	
必修科目	●文化交渉学演習(1)A・B	●文化交渉学演習(2)A・B	●文化交渉学演習(3)A・B	博士論文
領域選択	●東アジア文化資料研究A・B ●文化交渉学領域研究A・B	●東アジア文化資料研究(他領域) ●文化交渉学領域研究(他領域)		
共通科目	●文化交渉学概論A・B ●文化交渉学特殊研究A・B	●文化交渉学資料調査論 ●アカデミック外国語A・B	●共通講義科目(前期課程・後期課程)	

多様な入試制度

留学生の受入

本研究科では多様な入試制度を用意し、本研究科の理念・目的・教育目標の実現にふさわしい学力をもつ優れた人材を迎えます。特に、国際的な視野をもつとともに学際的な研究能力を身につけた大学院生を育てることを目標とする本研究科では、前期課程・後期課程ともに定員の約半数を留学生定員と位置づけ、外国人留学生入試及び外国人留学生特別推薦入試による、特に東アジア各国からの留学生募集に重点を置いています。

博士課程前期課程

- 学内進学試験【試験内容】口頭試問
- 一般入学試験【試験内容】筆記試験（外国語）、口頭試問
- 外国人留学生入学試験【試験内容】筆記試験（日本語）、口頭試問
- 社会人入学試験【試験内容】口頭試問
 - これまでの経験・実績を踏まえた研究計画書及び業績報告書の提出を求めます。
- 飛び級入学試験【試験内容】口頭試問
 - 大学の3年次修了時点で、3年間の学部成績が優秀な一定の学力を満たす学生を対象とします。
- 留学生別科特別入試【試験内容】口頭試問

秋学期入学について

本研究科の入学時期は原則として毎年4月ですが、 Semester制のメリットを活かして秋学期入学者の募集も行っています。定員は設定しませんが、研究科委員会が必要かつ適切と認められた者の入学を許可します。また、春学期入学者と同様の体系的教育が受けられるよう十分な配慮を行います。

博士課程後期課程

- 一般入学試験【試験内容】筆記試験（外国語）、口頭試問
- 外国人留学生入学試験【試験内容】筆記試験（外国語）、口頭試問
- 社会人入学試験【試験内容】口頭試問
 - これまでの経験・実績を踏まえた研究計画書及び業績報告書の提出を求めます。

※このほか、優秀な留学生を対象に本研究科が指定する大学による推薦及び本研究科選考によって入学を許可する外国人留学生特別推薦入学試験があります。

研究成果発表の場

○ 口頭発表

〈国際会議〉「院生フォーラム」

本研究科は、「日中韓伊院生フォーラム」として、1年に4回の大学院生による大学院生のための研究発表をサポートしています。

日本（関西大学）、中国（北京外国語大学）、韓国（嶺南大学校）、イタリア（ローマ大学サピエンツァ）が開催校となり、大学院生や若手研究者による活発な学術交流が展開されています。

院生フォーラムでは、多言語（日本語、中国語、朝鮮語、英語）による発表が可能であるため、母語や外国語による研究発表の経験を積むことができます。



院生フォーラム（北京外国語大学）



院生フォーラム（ローマ大学）



セミナースペース（関西大学 以文館4階）



院生研究室（関西大学 以文館4階）

○ 論文発表



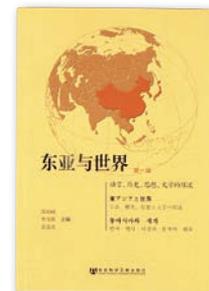
東アジア文化交渉研究

東アジア文化研究科の紀要です。学内外の研究者の他、院生の投稿も可能です。



文化交渉

東アジア文化研究科の院生論集です。院生が中心となって編集しています。



东亚与世界

毎年、本学や海外で開催する院生フォーラムの優秀論文集です。日中韓英の4カ国語を収録しています。

○ 現役院生の声

院生による院生のための研究発表の場 博士課程後期課程 畑野 吉則

東アジア文化研究科では毎年、日本、中国、韓国、イタリアにおいて国際院生フォーラムを開催しています。私の専攻は中国古代史なので、中国でのフォーラムを中心に参加しています。本フォーラムは最大で80人程度の院生が参加する大規模なもので、外国語での研究報告を奨励しています。また、各フォーラムの準備段階では、予稿集やタイムテーブルの作成、大会運営に必要なさまざまな手配に携わり、将来、研究者として必要なスキルを学ぶことができました。その後、私はここでの外国語の研究報告や学術交流の経験を活かし、2015年9月から中国・北京大学に留学しています。そして、2016年8月に甘肅省蘭州市で開催された「第三回簡牘学国際学術シンポジウム」において中国語での学術報告を行なう機会も得られ、最新の研究動向に触れることができました。

また、博士課程院生が中心の編集委員を組織し、院生論集『文化交渉』を刊行しています。私は2014年度の編集委員長を務め、第3号、第4号の刊行に携わりました。編集委員の職務は論文の査読から印刷業者との打ち合わせまで多岐に渡ります。特に東アジア文化研究科の院生は、東アジアの様々な時代の歴史・思想・文学・言語・芸術など専攻分野が多様であるため、投稿された論文の査読を分担して行ない、査読コメントを添えて返却する作業は、幅広い知識と問題意識が要求されました。しかし、このような院生相互の研究交流によって各分野を越えた議論が生まれ、分野・時代・地域に縛られない研究領域の拡大へと繋がったことは間違いなく、東アジア文化研究科の特色の一つであると感じています。

○ 修了生の声



王 鑫
(北京大学助理教授)

私は北京大学哲学系修士課程を修了後、2009年から2012年まで東アジア文化研究科の文化交渉学専攻・博士課程で学びました。文化交渉学専攻の多面的で自由、濃厚な学術的雰囲気、そして豊富な蔵書をもつ関大図書館は今に至るまで心の中に懐かしく刻まれています。博士課程において私は「日本近世の易学」をテーマとし、経学史と哲学史の方法を結びつけ、中国に起源する経学の発展と影響が前近代の東アジア世界に広く及ぶことをふまえて、江戸時代の易学思想家および易学関連著作に専門的研究をほどこしました。そして、彼らの易学が哲学思想面でどのような位置と役割をもつのかを通じて、東アジアにおける経学思想の交流と展開の豊かな内容の解明に努めました。

学位取得後、私は北京大学哲学系の助理教授となり、易学や宋明時代の哲学につき引き続き研究を進めています。文化交渉学専攻における学習と研究は私の学問人生の中で非常に重要な段階を占めているのです。



中山 創太
(神戸市立博物館学芸員)

学芸員として博物館に勤務して3年が経ちますが、学芸員の仕事は、予想以上に多岐にわたっており、いつも忙しく働いています。展覧会の準備に始まり、カタログ製作はもとより、案内チラシの作成、また来館者への作品解説会など、数え上げればきりがありません。これらの仕事は、大学院時代のアカデミックな研究内容とは大きく異なりますが、それでも学芸員活動の基盤となっているのが、学生時代に学んだ基礎知識、論文執筆、学会発表、語学などです。要するに、読み書き話すという基本的な作業、しかも高度な作業を身につけていなければ、学芸員としては通用しないわけです。

東アジア文化研究科で学んだ多くの研究内容が、今の私の仕事を支えてくれていると考えています。論文執筆や学会発表を次々とこなさねばならなかった大学院時代は、本当に忙しいものでしたが、そうした経験の蓄積が、現在のもとより、今後の仕事に大いに役に立つことは間違いないと確信しています。



韓 一瑾
(中山大学専任講師)

2010年より関西大学東アジア文化研究科、内田慶市教授のご指導の下、言語接触と中国語教育史について研究しました。東アジア文化研究科の特色は「文化交渉」にあり、学生の学問視野と外国語能力を重視しています。

在学中は、自分自身の学術力を研鑽するばかりでなく、研究者としての素養を磨く機会をいただきました。自分の研究のオリジナリティーを探すために指導教授と相談する日々、初めての英語での学会発表のために研究室の皆さんと練習する日々、その全てが貴重な思い出となりました。他にも、国内外の学会発表の機会をいただくばかりか、イタリアローマと日本国内の天草島でフィールドワークも行うことができました。こうした経験は、今後研究に取り組む上でも必ず活かされると思います。

私はいま中山大学（中国広州）国際漢語学院で講師として働いており、今年（2016年）で3年目となります。今でも研究科の先生方や各研究分野で活躍している同級生達とつながりを持っています。当時の私を支えてくれた母校と指導教授にとっても感謝しています。

○ 就職状況

本研究科修了後の主な就職先は以下の通りです。修了生が目ざましい活躍をしていることがわかります。

博士課程後期課程

教育・研究職…北京大学哲学系（助理教授）、中山大学博雅学院（准教授）、北京語言大学（専任講師）、河北大学歴史学院（専任講師）、山東大学日語系（専任講師）、成都理工大学外語学院日語系（専任講師）、浙江大学（専任講師）、浙江理工大学（専任講師）、浙江工商大学東方文化学院（准教授）、江漢大学（専任講師）、武漢大学国学研究院（専任講師）、寧波大学（准教授）、廈門大学外文学院（専任講師）、閩南師範大学（専任講師）、中山大学国際漢語学院（専任講師）、台湾大学国家発展研究所（専任講師）、奈良工業高等専門学校（専任講師）、大谷大学（助教）、関西大学（講師）、大阪大学（講師）、同志社大学（講師）、同志社女子大学（講師）、近畿大学（講師）、台湾・東海大学（講師）、ハイデルベルク大学（講師）、慶尚大校（講師）

学芸員など…神戸市立博物館（学芸員）、高松市美術館（学芸員）、吹田市立博物館（学芸員）、新居浜市総合文化センター美術館担当学芸員、(株)塩谷美術（美術専門社員）、京都工業繊維大学美術工芸資料館（学芸員）、久万町立美術館（学芸員）、三重県立美術館（学芸員）

修士課程前期課程

企業…アズワン株式会社、イビスタイルズ大阪、カルソニックカンセイ（上海）、クレオ、株式会社Jプロデュース、シャープ（蘇州）、正泰集団（上海）、株式会社タピエ、デンソー、Dr.Recella 株式会社、成田空港管理会社、株式会社ニトリ、日榕株式会社（大阪）、日本通運株式会社、華為技術日本株式会社（ファーウェイ・ジャパン）、ホテルメトロ The21、三井住友海上火災保険会社（上海）、三菱東京UFJ銀行武漢支店、リクルート上海支店など。

○ 奨学金取得状況

文部科学省国費外国人留学生／文部科学省外国人留学生学習奨励費／市川奨学財団奨学金／大阪協栄信用組合奨学金／西村奨学財団奨学金／日本学術振興会／川口静記念奨学金／大遊協国際交流・援助・研究協会奨学金／電通育英会奨学金／西村奨学財団奨学金／ロータリー米山記念奨学会奨学金／富士ゼロックス（株）小林基金（研究助成）など

○ 日本学術振興会特別研究員

平成25年～29年採択者数（DC1・DC2） 6名

教員紹介・研究テーマ一覧

○ 言語と表象

中谷 伸生

NAKATANI Nobuo

教授/博士(文学) 関西大学
博士(文化交渉学) 関西大学

日本美術史、東アジア美術交渉論

江戸時代から近代の日本絵画史を東アジア美術史の観点から研究。とりわけ、狩野派、文人画、写生派、近代・現代美術が中心。アジアの中の日本美術という立場から、木村兼葎堂とその周辺の大阪の画家たちの画業を検証。また、江戸時代に長崎にやってきた来船画人の顕彰や、近代・現代の日本人画家を中国や台湾の画家と比較する美術批評。加えて、アジア美術史を唱えた岡倉天心の芸術論を美術交渉学の方法論として研究、美術館学芸員の養成にも力を入れている。



内田 慶市

UCHIDA Keiichi

教授/博士(文学) 関西大学
博士(文化交渉学) 関西大学

東西言語文化接触研究、中国語学

16世紀以降の「西学東漸」という大潮流の中での東西の言語文化接触研究を主なテーマとしている。言語は人の表現の一つであり、言語の背景には「文化」があるという基本的な言語観に立って、東西の言語文化接触における様々な事象を明らかにしようとするものであるが、この場合に採られる方法は「傍観者清」つまり「周縁からのアプローチ」というものになる。従って扱う資料は中国だけでなく欧米等のものも含まれる。主な著書論文に『近代における東西言語文化接触の研究』(2001)、『文化交渉学と言語接触—中国言語学における周縁からのアプローチ』(2010)等多数。



奥村 佳代子

OKUMURA Kayoko

教授/博士(文学) 関西大学

東アジアの中国語 文化受容・唐話・中国語学

研究の対象は、東アジアの中国語資料および日本語資料であり、特に日本、朝鮮、琉球の中国語学習、中国語受容を多角的に捉えることによって、言語文化史に新たな一面を加えることを目標としている。現在は、17~19世紀を中心に日本における中国語および中国文学の受容が、日本の言語文化にどのような変化をもたらしたのかをテーマに、個々の資料を丹念に読むことに重点をおくとともに、地域にとらわれず、話し言葉として書かれた中国語に注目している。



○ 思想と構造

陶 徳民

TAO Demin

教授/文学博士 大阪大学

日本漢学、日中米文化交渉史

近世近代日本の学問・教育史に大きな足跡を残した横徳堂と泊園という大阪の二大書院およびその思想背景としての朱子学と徂徠学の特質、近代中国との政治文化交渉に深く関わった重野安繹・西村天因・内藤湖南など漢学者、東洋史学者の学問志向と政治意識の特徴を解明しようとしている。最近、日中米文化交渉史におけるS・W・ウィリアムズ、A・リンカーン、渋沢栄一、孫文、張謇など大物宣教師・政治家・財界人の影響力にも注目し始めている。



吾妻 重二

AZUMA Juji

教授/博士(文学) 早稲田大学
博士(文化交渉学) 関西大学

東アジアの思想と文化、儒教史

東アジアの思想と宗教がフィールド。東アジア諸国の文化は、中国文化の伝播と諸地域におけるその受容と変容や、固有文化の独自の展開など様々なファクターが交錯し多様な姿を見せている。中国近世儒教史の研究から出発しつつ東アジアの多様性に着目し、現在は中国のほか韓国や日本、ベトナムの儒教、儀礼、祭祀、民間の学校(書院)などについて精力的に研究している。著書、訳書多数。



二階堂 善弘

NIKAIDO Yoshihiro

教授/博士(文学) 東洋大学
博士(文化交渉学) 関西大学

東アジアの民衆文化、道教

東アジアの民間信仰や道教などを主要な研究テーマとしている。また宗教と深い関わりを持つ民間文芸についても探求している。昨今は日本を含めた東アジア各地域の廟や寺院を訪れ、祭祀や祭神の状況について調査を行うことが多い。中国古典データベースなどの漢学文献の情報処理に関する論文も多数ある。著書・訳書多数。Webサイトの<http://www.2itc.kansai-u.ac.jp/~nikaido/>にてエッセイや論文を公開する。



○ 歴史と動態

藤田 高夫

FUJITA Takao

教授/博士(文学) 関西大学

東アジアの歴史と文化、 東アジア古代交渉史、中国出土資料研究

東アジアの歴史動態と文化交渉を研究領域とする。秦漢時代を中心に、中国における文書行政システムを基軸とする国家制度の形成と発展、および東アジア世界における展開と相互の関連性を、文献と出土資料を併用して研究している。また東アジアにおける中心と周縁のダイナミズム解明の一環として、簡牘(木簡・竹簡)資料を用いた中国西北辺境史研究を併行して進めている。近年は、近代学術としての歴史学の形成を東アジア諸国を視野に入れて比較する新領域を開拓中。



篠原 啓方

SHINOHARA Hirokata

教授/博士(文学) 高麗大校

東アジアの歴史と動態・朝鮮古代史・ 韓国・朝鮮文化

テーマは東アジアのダイナミズムを、文字文化と物質文化の両面から捉えること。これまでの主な対象は朝鮮古代史で、金石文資料を中心に、高句麗の国際認識と対外関係、新羅の諸制度を研究してきた。また並行して東アジアの碑石文化にも関心を持ち、韓国・日本・中国・ベトナムで資料を収集し、物質文化の文化交渉と変容について考えている。最近ではアジアに広がる韓国現代文化を手がかりに、日本と韓国、アジアと韓国の文化交流にも注目している。



池尻 陽子

IKEJIRI Yoko

准教授/博士(文学) 筑波大学

東アジアの歴史と動態、チベット仏教文化圏の交渉史、東アジア近世史

東アジアの歴史と動態がフィールド。研究テーマは、チベット仏教文化圏(主にチベット・モンゴル・中国)の交渉史であり、特に17世紀半ば以降東アジアに一大帝国を築いた清朝において、チベット仏教僧がどのような役割を果たしていたのかを検討している。主要な成果として『清朝前期のチベット仏教政策: 扎薩克喇嘛制度の成立と展開』(2013)を出版。最近では、チベット・モンゴル・中国の境界にあたる青海東部地方のチベット仏教寺院ネットワークの存在に注目して研究を進めている。



2012年、2013年採択 文部科学省研究拠点形成費等補助金(卓越した大学院拠点形成支援補助金)

関西大学大学院東アジア文化研究科 Graduate School of East Asian Cultures, Kansai University

http://www.kansai-u.ac.jp/Gr_sch/eas/index.html

関西大学 千里山キャンパス 〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 TEL 06-6368-1121 (代)